

計 | 雨 | 晴



私には、五年前から女房に内緒でひそかに心を寄せている女性がいる。名前はアン、と言っても今評判の赤毛のアンではない。アンに会ったのは、「サン・ジェルマン・デプレの恋」と題する写真展であった。アンは腐食した窓ガラスの前で絶望の表情を浮かべて立っていた。

アムステルダムからパリに出てきた無名の写真家、エルステンがセーヌ河左岸のサン・ジェルマン・デプレのカフェにたむ

る。ボヘミアンの若者たちをカメラに撮ったのは、一九四九年から約四年間であった。それは「セーヌ左岸の恋」という写真集となり話題

「もうっんざり、終わりにしたいわ」と言って窓から飛び降りた十九歳のカキ。大半の若者が麻薬と酒におぼれていた。アンが後日語っている。「当時の仲間がこの明日のない生活から抜け出せた者は何人いたか?。若者たちをこれほど虚無的にさせたのは何だったのか。第二次

アンの青春

を呼んだ。アンを主人公に、そのアンをひそかに愛していたメキシコ人のロベルト、アンの女友達のエリ、そしてアンの恋人ヒール等々。そこにドキュメント風に描かれた若者たちの生き方は、青春と呼ぶにはあまりに暗い絶望の日々であった。

大戦は終わったが、新たな冷戦の脅威の下で忍び寄る核戦争の狂気を敏感に感じ取っていたのだろうか。アンの写真をみる度に考えさせられる。私は貧しい学生ではあったが、高度成長の中で多少の挫折と引き換えに希望も持て

平山 征夫 (日本銀行 新潟支店長)

た。しかし、その分アンほど人生をみてないのでは?。そして豊かさの中で青春を送る今の若者は?。新潟の「信濃川左岸の恋」はどうか?。

エルステンの写真集「巴里時代」の最後には「アンは有名な画家として絵を描いている。ナポリの南の山奥の修道僧の山小屋に住んで?。ロベルトはメキシコに帰り、闘いの中で殺された」と記されている。

ある人いわく、人間は一生青春の中にある。ただ青の字が生性、青、成、盛、静、聖と変わっていった。果たして、私は今どのせい春にいるのだろうか(二番目?)。なお、私がアンにほれているというのは秘密です。よろしく!ー

「アンの青春」

平山 征夫

エルスケンの「セーヌ左岸の恋」は六十年近い月日が経過した今でも人氣が高く、時折展覧会が開かれている。

今年の二月にも六本木のギャラリィで開催された。アンはそこでも絶望の表情を浮かべ現代の若者に何かを訴えていたことだろう。大戦が終わった途端冷戦構造となり核戦争の恐怖が広がったあの時代、我が国に集団的自衛権行使を容認する際安倍総理は「安全保障状況はかつてなく厳しい状況にある」と訴えたが、アンの時代に比べてそうなのだろうか。今パリはI Sのテロの恐怖で大きな不安に取り囲まれているが……。

いつの時代でも、将来に夢を抱く若

者は時代に敏感だ。私もそうだった。

だからアンの気持ちが痛いほど分かる。惚れたのもそのせいだろう。でももう私の「時代への感性」はかなり劣化してしまった。だからその後アンみたいに惚れた人はいない。若い日の感性を完全に失わないようこの写真集と一緒に大切にしている曲がある。それはシャルル・アズナヴールの「ラ・ボエーム」というシャンソンだ。歌の内容は「二十歳の頃、画家の卵だった私はモンマルトルの小さなアパートマンで彼女をヌードモデルに貧しいけれど夢に燃えた青春を送っていた。カフェで仲間と詩を読み酒を酌み交わし、冬の寒さも忘れて語り合った。そして君は美しかった。それは我々が二十歳だったということだ。ある日昔住んだモンマルトルの街を尋ねた。ア

トリエも街並みもなくリラの花も枯

れていた。青春の頃の街は何も残っていなかった」という内容だ。この曲のエンディングは本当に美しい。私がずっと聞いていたレコードではこのピアノ伴奏を無名時代のミッシェル・ポルナレフが弾いている。そこにも成功を夢見る青春があっただろう。写真に次第に興味を抱いた私はエルスケンのほかに好きな写真家に出合った。フランス人らしいエスプリの効いたパリ風景が面白いアンリ・ブレッソンやアフリカの滅びゆく動物を撮ったエリック・ブランドなどが、何ととっても大きな感動を受けたのはセバスタン・サルガドだ。世界銀行の仕事をしていた彼は、アフリカなど途上国融資の調査のため現地を訪れ写真

のカメラマンとなり、「神の眼を持った男」と言われるまでになった。アフリカの砂漠をさまよう難民の写真には衝撃を受けた。母と一緒に砂漠を行く少年の足の細さにすべてが表現されている。正面からカメラを見据えた少年の眼はアン以上の悲しみを湛えている。まだ青春に達していない少年の絶望の眼だ。今夏、東京では「セバスタン・サルガド―地球へのラブレター」という映画が上映された。戦争・難民・飢餓を訴える写真を撮り続け、サルガドは精神を病みしばらく活動を停止した。再開した彼が追い求めたのは残された地球の楽園だった。「Genesis」という写真集が出版された。それを見ていると写真の奥深さに心が震える。

(平成二十七年十二月十一日)